

白文に挑戦しよう！（その1）

2024.05.04
by KENZOU

基本装備の準備も整いましたので、これからいよいよ白文を読んでいくことにします。ただ、基本装備が整ったとはいえ、どっこいそう簡単に白文は読めません。個人的に最大の難関と思うのは漢字の訓読みの仕方が余りにも多いという事実。例えば「道」という漢字を「漢字林」（大修館書店）で紐解くと、①みち、②みちする、③いう、④みちびき、⑤おさめる・・・、等々といっぱい載っています。訓読みは、中国から漢文が輸入されたはじめた奈良・平安時代の頃より、漢文の文脈・文意を汲みとつていかに日本風に読んでいくか・・・そこに大いに汗をかき苦労された努力の結晶だと思えます。漢字の数は5万とも6万ともいわれますが、漢字の訓読みは漢文を読みながらその都度習い、覚えていくしかないですね。

さて、白文挑戦のターゲットとしては、市販されている漢文問題集（左記）を取り上げました。掲載されている漢文（問題文）を改めて白文に書き直し、その白文を読み進めていくことにします。

漢文法の語法や句法は二千年前の漢の時代までにその九割がた固まり、その後大きな変化がないまま今日に至っているといわれます。

さて、白文に対峙したとき、はて主語は？、述語は？、目的語はなんだ？・・・はて、この句法は？、この漢字の読み方は？などなど、頭の中はグルグル回転。そう気楽に読めるものではないですね。漢字で敷き詰められたジグソーパズルを解くような・・・そしてとにかく読めた時の僅かばかりの爽快感。いずれにしても漢籍の内容を楽しんでください。なお、本稿は白文を読むことに特化しているので現代語訳は省略しました。必要な方は当該の参考図書（問題集）を参照されればいいでしょう。

—— Let's Start! ——

- その1
 - ・ 松井光彦編著・レベル別問題集「実践演習・基礎漢文」槇原書店
- その2
 - ・ 河合塾国語科編・「漢文・入試精選問題集9」河合出版
- その3
 - ・ 土屋裕著「漢文道場」Z会出版
- その4
 - ・ 三宅崇広著「難関大突破・新漢文問題集」駿台文庫

I・白文に挑戦（その1）

1 漢文訓読の基礎

「江雪」（中唐・柳宗元）

A 千山鳥飛絶 万径人蹤滅

孤舟蓑笠翁 独釣寒江雪

○柳宗元（りゅうしゆげん）＝二十一才の若さで進士に及第、五年後に博学宏詞科にも合格。減税・宦官勢力駆逐等の政治改革に乗り出す。しかし病身順宗の退位と共に新政は挫折。左遷され中央に復帰することなく柳州の地で四十七才で亡くなる。○人蹤（ひとあしご）＝人の足跡。○寒江（かんかう）＝冬の川。

千山鳥飛ぶこと絶え 万径人蹤滅す
孤舟蓑笠の翁 独り釣る寒江の雪

「論語」学而（中国春秋時代・孔子）

B 子曰、「学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦樂乎。人不知而不愠、不亦君子乎。」

○孔子＝魯国に生まれた春秋時代の中国の思想家。愠（うら）む＝腹をたてる。

子曰はく、「学んで時に之を習ふ、亦た説はしからずや。朋の遠方より来る有り、亦た樂しからずや。人知らずして愠みず、亦た君子ならずや」と。

「朱文公勸学文」（南宋・朱熹）

C 勿謂今日不学而有来日。勿謂今年不学而有来年。日月逝矣。歳不我延。嗚呼老矣。是誰之愆

○朱熹＝南宋の儒学者。儒学を軸とした中国思想を一つの体系「朱子学」としてまとめた。○愆（あやま）ち＝過失。

謂ふ勿かれ今日学ばずとも来日有り。謂ふ勿かれ今年学ばずとも来年有り。日月逝けり。歳我と延びず。嗚呼老いたり。是れ誰の愆ちぞや。

A・推敲

〔唐詩紀事〕

賈島赴拳至京、騎驢賦詩、得僧推月下門之句。欲改推作敲。引手作推敲之勢、未決。不覺衝大尹韓愈。乃具言。愈曰、「敲字佳矣。」遂並轡論詩。

○唐詩紀事 唐代の詩人についてその詩と詩にまつわる話、小伝、評論などを収めた書。宋の計有功編纂○賈島・韓愈 共に唐代の詩人。○驢 驢馬。○拳 科挙試験。○賦詩 詩を作る。○敲す 叩く。○轡 手綱。

賈島拳に赴きて京に至り、驢に騎りて詩を賦し、僧は推す月下の門の句を得たり。推を改めて敲と作さんと欲す。手を引きて推敲の勢を作すも、未だ決せず。覺えず大尹韓愈に衝たる。乃ち具に言ふ。愈曰はく、「敲の字佳し」と。遂に轡を並べて詩を論す。

B・矛盾 (韓非子)

楚人有鬻盾与矛者。誉之曰、「吾盾之堅、莫能陷也。」又誉其矛曰、「吾矛之利於物無不陷也。」或曰、「以子之矛、陷子之盾、何如。」其人弗能応也。

○韓非子 韓非による春秋戦国時代の思想・社会の集大成と分析の書。○韓非 通説では出自は韓の公子で、後に秦の宰相となつた李斯とともに荀子に学んだとされる。韓非は、生まれつき重度の吃音であり、幼少時代は王安や横陽君成も含む異母兄弟から「吃非」と呼ばれて見下され続けていたが、非常に文才に長け、書を認める事で、自分の考えを説明するようになった。この事が、後の『韓非子』の作成に繋がつたものと思われる。○鬻 売る。○陷す 貫く。

楚人に盾と矛とを鬻ぐ者あり。之を誉めて曰はく、「吾が盾の堅きこと、能く陷す莫きなり」と。また其矛を誉めて曰はく、「吾矛の利きこと、物に於て陷さざる無きなり」と。或るひと曰はく、「子の矛を以て、子の盾を陷さば、何如」と。其の人応ふる能はざるなり。

3 助長・敬遠

A・助長（「孟子」）

宋人有閔其苗之不長而揠之者。芒芒然歸、謂其人曰、「今日病矣。予助苗長矣。」其子趨而往視之、苗則槁矣。天下之不助苗長者寡矣。

○孟子めいし＝中国戦国時代の儒学思想家。性善説を主張し、仁義と民本による王道政治を目指した。○閔みんえる＝心配する。○揠め＝引く抜く。○病やむ＝つかれる。○趨はる＝おもむく。○槁かれる＝枯れる。

宋人そうじんに其そのの苗なえの長ながぜざるを閔みんへて之これを揠めく者もの有り。芒芒まうまう然ぜんとして歸かへり、其そのの人ひとに謂いひて曰いはく、「今日こんにち病びやれたり。予われ苗なえを助たすけて長ながせしめたり」と。其そのの子こ趨はりて往ゆきて之これを視みれば、苗なえ則すなはち槁かれたり。天下てんかの苗なえを助たすけて長ながせしめざる者ものは寡すくし。

B・敬遠（「論語」）

樊遲問知。子曰、「務民之義、敬鬼神而遠之。可謂知矣。」問仁。曰、「仁者先難而後獲。可謂仁矣。」

○樊はん遲ち＝孔子の弟子 ○鬼き神しん＝死者の靈魂 ○仁に＝他者に対する慈愛。儒教思想の最重要な徳目の一つ。

樊はん遲ち知ちを問とふ。子こ曰いはく、「民たみの義ぎを務とめ、鬼ま神しんを敬けいして之これを遠とほざく。知ちと謂いふべし」と。仁じんを問とふ。曰いはく、「仁じん者しやは難かたきを先まにして獲あるを後あとにす。仁じんと謂いふべし」と。

4 断腸・逆鱗

A・断腸（世説新語 南朝宋・劉義慶・編）

桓公入蜀至三峽中。部伍中、有得猿子者。其母緣岸哀号、行百余里不去。遂跳上船、至便即絶。破見其腹中、腸皆寸寸断。公聞之怒、命黜其人。

○劉りゅう義ぎ慶けい＝南朝宋の皇族。臨川康王。武帝劉裕の甥。『世説新語』の撰者。○世説新語＝漢から東晋にかけて活躍した名工のエピソードを集録。○三峽＝長江上流の三つの溪谷。○部伍＝部隊。○猿さるの子こ＝子猿。

○體たい＝こころみ。

桓公蜀に入り、三峽の中に至る。部伍の中に、猴の子を得たる者あり。其の母岸に縁りて哀号し、行くこと百余里にして去らず。遂に船に跳上し、至れば便即ち絶ゆ。其の腹中を破り見れば、腸皆寸寸に断えたり。公之を聞きて怒り、命じて其の人を黜く。

B・逆鱗 (「韓非子」説難)

夫竜之為虫也、可柔狎而騎也。然其喉下有逆鱗径尺。若人有嬰之者、則必殺人。人主亦有逆鱗。説者能無嬰人主之逆鱗、則幾矣。

○虫＝昆虫類の総称。動物の総称。○柔狎＝ならす。○嬰鱗＝竜の顎の下にある鱗に触れる。○人主＝君主。○幾い＝近い。

夫れ竜の虫たるや、柔狎にして騎るべきなり。然れども其の喉下に逆鱗の径尺なる有り。若し人之に嬰るる者有らば、則ち必ず人を殺す。人主にも亦た逆鱗有り。説く者能く人主の逆鱗に嬰るること無くんば、則ち幾し。

5 塞翁が馬 (淮南子) 「諺」人間万事塞翁が馬

夫禍福之転而相生、其変難見也。近塞上之人、有善術者。馬無故亡而入胡。人皆弔之。其父曰、「此何遽不為福乎。」居数月、其馬将胡駿馬而帰。人皆賀之。其父曰「此何遽不能為禍乎。」家富良馬。其子好騎、墮而折其髀。人皆弔之。其父曰、「此何遽不為福乎。」居一年、胡人大入塞。丁壮者引弦而戦、近塞之人、死者十九。此独以跛之故、父子相保。故福之為禍、禍之為福、化不可極、深不可測也。

○淮南子＝中国古代の様々な思想家の思想をまとめた百科全書風の書物。○塞上＝辺境のほと。○何遽乎＝どうして～しようか、～するはずがない。(反語形)。○胡＝中国北方・西方の異民族。○術＝占い。○亡げる＝逃げる。○弔す＝憐れむ。○髀＝ももの骨。○丁壮者＝若者。

夫れ禍福の転じて相生ずるは、其の變見難きなり。塞上に近きの人に、術を善くする者有り。馬故無くして亡げて胡に入る。人皆之を弔す。其の父曰はく、「此れ何遽ぞ福と為らざらんや」と。居ること数月、其の馬胡の駿馬を將めて歸る。人皆之を賀す。其の父曰はく、「此れ何遽ぞ禍と為ること能はざらんや」と。家良馬に富む。其の子騎を好み、墮ちて其の髀を折る。人皆之を弔す。其の父曰はく、「此れ何遽ぞ福と為らざらんや」と。居ること一年、胡人大いに塞に入る。丁壯の者弦を引きて戦ひ、塞に近きの人、死する者十に九なり。此れ独り跛の故を以て、父子相保てり。故に福の禍と為るは、化極むべからず、深測るべからざるなり。

6 十八史略「伯夷・叔斉」(曾先之)

西伯卒、子發立。是為武王。東觀兵至於盟津。是時諸侯不期而会者八百。皆曰、「紂可伐矣。」王不可引歸。紂不悛。王乃伐紂、載西伯木主以行。伯夷・叔斉叩馬諫曰、「父死不葬。爰及干戈、可謂孝乎。以臣弑君、可謂仁乎。」左右欲兵之。大公曰、「義士也。」扶而去之。王既滅殷為天子、天下宗周。伯夷・叔斉恥之不食周粟。隱於首陽山作歌曰、「登彼西山兮、采其薇矣。以暴易暴兮、不知其非矣。神農・虞・夏忽焉没兮、我安適歸矣。于嗟徂兮、命之衰矣。」遂餓而死。

○十八史略＝三皇五帝の伝説時代から南宋までの十八の正史を要約し編年体で綴った歴史書。○曾先之＝宋末・元初の学者、政治家。進士及第後、地方官を歴任。宋滅亡後は隱居し「十八史略」を編む。○西伯＝西方諸侯の長。○卒＝死ぬ。○觀す＝あらわす。○可く＝きき入れる。○盟津＝黄河の渡し場の名。○紂＝紂王。殷の天子。○木主＝位牌。○叩える＝引き留める。○爰に＝ここにおいて。○伯夷・叔斉＝殷末・周初の賢人。○干戈＝戦い。○左右＝側近。○兵＝述語で読む場合「つつ、き」と読むことがある。○宗＝頭。第一人者。○扶而去之＝扶けて之を去らしむ(文脈から使役に読む)。○粟＝穀物の総称。○神農・虞・夏＝神農氏・帝舜・夏の禹王。○忽焉＝たちまち。○適歸＝身を落ち着ける。○徂く＝死ぬ。

西伯卒し、子の發立つ。是を武王と為す。東のかた兵を觀して盟津に至る。是の時諸侯期せずして会する者八百。皆曰はく、「紂伐つべし」と。王可かずして引きて歸る。紂悛め

ず。王乃ち紂を伐たんとし、西伯の木主を載せて以て行く。伯夷・叔斉馬を叩へて諫めて曰はく、「父死して葬らず。爰に干戈に及ぶ、孝と謂うべけんや。臣を以て君を弑す、仁と謂べけんや」と。左右之を兵せんと欲す。大公曰はく、「義士なり」と。扶けて之を去らしむ。王既に殷を滅ぼして天子と為り、天下周を宗となす。伯夷・叔斉之を恥ぢて周の粟を食らはず。首陽山に隠れ、歌を作りて曰はく、「彼の西山に登りて、其の薇を采る。暴を以て暴に易へ、其の非を知らず。神農・虞・夏忽焉として没しぬ、我安くにか適帰せん。于嗟徂かん、命の衰へたるかな」と。遂に餓えて死せり。

7

十八史略「まず隗より始めよ」(曾先之)

燕昭王弔死問生、卑辞厚幣、以招賢者。問郭隗曰、「斉因孤之国乱而襲破燕。孤極知燕小不足以報。誠得賢士、与共国、以雪先王之恥、孤之願也。先生視可者。得身事之。」隗曰、「古之君有以千金使涓人求千里馬者。買死馬骨五百金而返。君怒。涓人曰、『死馬且買之、況生者乎。馬今至矣。』不期年、千里馬至者三。今王必欲致士、先從隗始。況賢於隗者。豈遠千里哉。」於是昭王為隗改築宮、師事之。於是士爭趨燕。

○燕・齊＝戦国時代の国の名。○昭王＝戦国時代の燕の国王。○郭隗＝燕の昭王の家臣。○孤＝王侯の謙称。
○卑＝低い。○幣＝贈り物。○報＝お返し。○雪ぐ＝ぬぐい清める。○視す＝教える。○事える＝主君・目上の人に仕える。○涓人＝宮廷の掃除・取り次ぎをする人。○期年＝丸一年。○致す＝招く。○趨く＝赴く。

燕の昭王死を弔ひ生を問ひ、辞を卑くし幣を厚くして、以て賢者を招く。郭隗に問ひて曰はく、「斉孤の国の乱るるに因りて襲ひて燕を破る。孤極めて燕の小にして以て報ゆるに足らざるを知る。誠に賢士を得て、与に国を共にし、以て先王の恥を雪ぐは、孤の願ひなり。先生可なる者を視せ。身之に事ふるを得ん」と。隗曰はく、「古の君に千金を以て涓人を以て千里の馬を求めしむる者有り。死馬の骨を五百金に買いて返る。君怒る。涓人曰はく、

『死馬すら且つ之を買ふ、況んや生ける者をや。馬今に至らん』と。期年ならずして、千里の馬至る者三。今王必ず士を致さんと欲せば、先ず隗より始めよ。況んや隗よりも賢なる者をや。豈に千里を遠しとせんや』と。是に於いて昭王隗の為に改めて宮を築き、之に師事す。是に於て士争ひて燕に趨く。

8 十八史略「燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや」(曾先之)

陽城人陳勝、字涉。少与人傭畊。輟畊之隴上、悵然久之曰、「苟富貴無相忘。」傭者笑曰、「若為傭畊、何富貴也。」勝大息曰、「嗟呼、燕雀安知鴻鵠之志哉。」至是与吳広起兵于蕲。時発間左戍漁陽。勝・広為屯長。会大雨道不通。乃召徒属曰、「公等失期。法当斬。壮士不死則已、死即拳大名。王侯将相寧有種乎。」衆皆従之。乃詐称公子扶蘇・項燕、称大楚。勝自立為將軍、広為都尉。大梁張耳・陳余、詣軍門上謁。勝大喜、自立為王、号張楚。諸郡県苦秦法争殺長吏以応涉。

○陽城・薪・魚陽・大梁Ⅱ地名。○傭畊Ⅱ人に雇われて田畑を耕す。○少Ⅱ若い。○与Ⅱ…のため。…にかわつて。○輟めるⅡ途中でやめる。○隴上Ⅱ畝のほり。○悵然Ⅱ恨み嘆くさま。○鴻鵠Ⅱ大きな鳥。○閻左Ⅱ秦の時代賦役を免じられ村の左側に住んでいた貧しい人々。○戍るⅡ守る。○屯長Ⅱ駐屯部隊の長。○徒属Ⅱ従者。○将相Ⅱ將軍・宰相。○詐りⅡ虚言。○都尉Ⅱ武官名。○詣るⅡ到着する。○長吏Ⅱ郡県の長官

陽城の人陳勝、字は涉。少くして人の与に傭畊す。畊を輟めて隴上に之き、悵然たること之を久しうして曰はく、「苟しくも富貴とならば相忘ること無からん」と。傭者笑いて曰はく、「若傭畊を為す、何ぞ富貴とならんや。」勝大息して曰はく、「嗟呼、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」と。是に至りて吳広と兵を蕲に起こす。時に閻左を發して漁陽を戍らしむ。勝・広屯長と為る。大雨に会いて道通せず。乃ち徒属を召して曰はく、「公等期を失ふ。法斬に当たたる。壮士死せずんば則ち已む、死せば則ち大名を拳げんのみ。王侯将相寧んぞ種有らんや」と。衆皆之に従ふ。乃ち詐りて公子扶蘇・項燕と称し、大楚と称す。勝は自立して將軍と為り、広は都尉と為る。大梁の張耳・陳余、軍門に詣りて上謁

す。勝大いに喜び、自立して王と為り、張楚と号す。諸郡の秦の法に苦しむもの、争つて長吏を殺して以て涉に応ず。

9 十八史略「死せる孔明生ける仲達を走らす」(曾先之)

亮数々挑司馬懿戦。懿不出。乃遣以巾幗・婦人之服。亮使者至懿軍。懿問其寢食及事煩簡而不及戎事。使者曰、「諸葛公夙興夜寐、罰二十以上皆親覽。所噉食不至数升。」懿告人曰、「食少事煩。其能久乎。」亮病篤。有大星、赤而茫墜亮營中。未幾亮卒。長史楊儀整軍還。百姓奔告懿。懿追之。姜維令儀反旗鳴鼓、若將向懿。懿不敢逼。百姓為之諺曰、「死諸葛走生仲達。」懿笑曰、「吾能料生、不能料死。」亮嘗推演兵法作八陣圖。至是懿案行其營壘、歎曰、「天下奇材也。」

○亮＝諸葛亮・蜀の宰相。○司馬懿＝三国時代の魏の將軍。○巾幗＝女性の髪飾り。○煩簡＝忙しいか暇か。
○戎事＝軍事・戦争。○夙に＝朝早く。○親ら＝自分で。○噉食＝貪り食う。○久し＝行く末がながい。
○楊儀・姜維＝蜀の人。○反る＝くつがえる。○料る＝推量する。○案行＝調べてまわる。○營壘＝とりで。
○八陣圖＝三国志の時代における戦の基本陣形。方陣、円陣、疎陣、数陣、錐行之陣、雁行之陣、鉤行之陣、玄襄之陣の八つ。

亮数々司馬懿に戦ひを挑む。懿出でず。乃ち遣るに巾幗・婦人の服を以てす。亮の使者懿の軍に至る。懿其の寢食及び事の煩簡を問いて戎事に及ばず。使者曰はく、「諸葛公夙に興き夜に寐ね、罰二十以上は皆親ら覽る。噉食する所は数升に至らず」と。懿人に告げて曰はく、「食少なく事煩はし。其れ能く久しからんや」と。亮病篤し。大星有り、赤くして茫あり、亮の營中に墜つ。未だ幾ならずして亮卒す。長史楊儀軍を整へて還る。百姓奔りて懿に告ぐ。懿之を追ふ。姜維儀をして旗を反し鼓を鳴らして、將に懿に向かはんとするがごとくせしむ。懿敢へて逼らず。百姓之が為に諺にして曰はく、「死せる諸葛生ける仲達を走らす」と。懿笑ひて曰はく、「吾能く生を料れども、死を料ること能はず」と。亮嘗て兵法を推演して八陣の図を作る。是に至りて懿其の營壘を案行し、歎じて曰はく、

「天下の奇材なり」と。

於是項王乃欲東渡烏江。烏江亭長檣船待。謂項王曰、「江東雖小、地方千里、衆數十万人、亦足王也。願大王急渡。今独臣有船、漢軍至、無以渡。」項王笑曰、「天之亡我、我何渡為。且籍与江東子弟八千人渡江而西、今無一人還。縱江東父兄憐而王我、我何面目見之。縱彼不言、籍独不愧於心乎。」乃謂亭長曰、「吾知公長者。吾騎此馬五歲、所當無敵。嘗一日行千里。不忍殺之。以賜公。」乃令騎皆下馬步行、持短兵接戰。独項王所殺漢軍數百人。項王身亦被十余創。

○司馬遷しはせん 若い頃全国を周遊し戦国諸侯の記録を収集する。父の意を継ぎ太史令となり、《史記》の編纂に着手。○項王けいおう 項羽。名は籍せき。秦末期の楚の武將。○烏江うけい 長江北岸の渡し場。○乃ちすなわち 二そこで(接続)。○独ひとりひとのみ(限定)。○縦たてえたとえとも(仮定)。○亭長ていぢやう 宿駅の長。○檣船せうせん 船を出す用意をする。○江東けいとう 長江下流の南岸。○亡ほろびるほろびる。○見えるまみみるみ 二おめにかかる。○公こう 二あなた。貴殿。○長者ちやうぢや 二有徳の人。○令しむし A令BC 二ABをしてCせしむ(使役)。○騎き 二騎兵。○短兵たんぺい 二刀剣などの短い武器。

是に於いて項王乃ち東して烏江を渡らんと欲す。烏江の亭長船を檣して待つ。項王謂ひて曰はく、「江東小なりと雖ども、地は方千里、衆は数十万人、亦た王たるに足るなり。願はくは大王急ぎ渡れ。今独り臣のみ船有り。漢軍至るも、以て渡ること無からん」と。項王笑いて曰はく、「天の我を亡ぼすに、我何ぞ渡ることを為さん。且つ籍江東の子弟八千人と江を渡りて西し、今一人の還るもの無し。縦ひ江東の父兄憐みて我を王とすも、我何の面目ありてか之に見えん。縦ひ彼言わずとも、籍独り心に愧じざらんや」と。乃ち亭長に謂うて曰はく、「吾公の長者たるを知る。吾此の馬に騎すること五歳、当る所敵無し。嘗て一日に行くこと千里。之を殺すに忍びず。以て公に賜はん」と。乃ち騎をして皆馬より下りて歩行せしめ、短兵を持して接戦す。独り項王のみの殺す所の漢軍數百人なり。項王の身も亦た十余創を被る。

11 論語「孔子の人生観」

長沮・桀溺耦而耕。孔子過之、使子路問津焉。長沮曰、「其執與者為誰。」子路曰、「為孔丘。」曰、「是魯孔丘與。」對曰、「是也。」曰、「是知津矣。」問於桀溺。桀溺曰、「子為誰。」曰、「為仲由。」曰、「是魯孔丘之徒與。」對曰、「然。」曰、「滔滔者、天下皆是也。而誰以易之。且而與其從辟人之士也、豈若從辟世之士哉。」耰而不輟。子路行以告。夫子憮然曰、「鳥獸不可與同群。吾非斯人之徒與、而誰與。天下有道、丘不與易也。」

○長沮・桀溺＝隱者の名。○耦＝二人並んで田畑を耕すこと。○津＝渡し場。○與＝神輿・車。○与＝疑問終助詞。○滔滔＝勢いのある水の流れ。転じて時勢が悪い方に止めがたい勢いで進んでいくさま。○而に＝逆接の接続詞。○耰す＝種をまいて土をかぶせる。○憮然＝失望・落胆してどうすることもできないでいるさま。○（※漢字「与」が多様に使われていることに留意。）

長沮・桀溺耦して耕す。孔子之を過ぎ、子路をして津を問はしむ。長沮曰はく、「其れ與を執る者は誰と為す。」子路曰はく、「孔丘と為す」と。曰はく、「是れ魯の孔丘か」と。對へて曰はく、「是れなり」と。曰はく、「是れ津を知らん」と。桀溺に問ふ。桀溺曰はく、「子は誰と為す」と。曰はく、「仲由と為す」と。曰はく、「是れ魯の孔丘の徒か」と。對へて曰はく、「然り」と。曰はく、「滔滔たる者、天下皆是れなり。而るを誰と以にか之を易へん。且つ而其の人を辟くるの士に從はんよりは、豈に世を辟くるの士に從ふに若かんや」と。耰して輟めず。子路行きて以て告ぐ。夫子憮然として曰はく、「鳥獸は与に群を同じくすべからず。吾斯の人の徒と与にするに非ずして、誰と与にせん。天下道有らば、丘与に易へざるなり」と。

12 孟子「孟子の比喻」

(A) 孟子曰、「仁人心也。義人路也。舍其路而弗由、放其心而不知求。哀哉。人有鶏犬放、則知求之。有放心而不知求。学問之道無他。求其方心而已矣。」

○仁＝慈悲の心。儒教の最高徳目。○義＝道理にかなうこと。孟子の主要な思想。○舍てる＝捨てる。

(A) 孟子曰はく、「仁は人の心なり。義は人の路なり。其の路を舍てて由らず、其の心を放ちて求むるを知らず。哀しいかな。人鶏犬の放たる有らば、則ち之を求むるを知る。放心有りて求むるを知らず。学問の道は他無し。其の方心を求むるのみ」と。

(B) 孟子曰、「今有無名之指、屈而不信。非疾痛害事也。如有能信之者、則不遠秦・楚之路。為指之不若人也。指不若人、則知惡之。心不若人、則不知惡。此之謂不知類也。」

○無名の指＝薬指。 ○信びる＝伸びる。 ○秦・楚＝秦と楚。 ○惡む＝憎む。

(B) 孟子曰はく、「今無名の指、屈して信びざる有り。疾痛して事に害あるに非ざるなり。如し能く之を信ばす者あらば、則ち秦・楚の路を遠しとせざらん。指の人に若からざるが為なり。指人に若かずんば、則ち之を惡むことを知る。心人に若かずんば、則ち惡むことを知らず。此を之れ類を知らずと謂ふなり」と。

(C) 孟子曰、「仁之勝不仁也、猶水勝火。今之為仁者、猶以一杯水救一車薪之火也。不熄、則謂之水不勝火。此又与於不仁之甚者也。亦終必亡而已矣。」

○熄む＝消す。 ○与する＝味方する。 加勢する。

(C) 孟子曰はく、「仁の不仁に勝つや、猶ほ水の火に勝つがごとし。今の仁を為す者は、猶ほ一杯の水を以て一車薪の火を救ふがときなり。熄まずんば、則ち之を水火に勝たずと謂う。此れ又不仁の与するの甚だしき者なり。亦た終に必ず亡はんのみ」と。

井

13

墨子「墨子の戦争観」(墨翟)

殺一人謂之不義、必有一死罪矣。若以此説往、殺十人、十重不義、必有十死罪矣。殺百人、百重不義、必有百死罪矣。当此天下之君子、皆知而非之、謂之不義。今至大為不義攻国、則弗知非。從而誉之、謂之義。情不知其不義也。故書其言以遺後世。若知其不義也、夫奚説書其不義以遺後世哉。(中略)今小為非、

則知而非之、大為非攻国、則不知非。從而誉之、謂之義。此可謂知義与不義之弁乎。是以知天下之君子弁義与不義之乱也。

○墨子＝中国戦国時代に活動した諸子百家の墨家の開祖。平和・博愛主義を説く。○十重＝十倍する。○當り＝……の時に／＼に当たり。これから「當此」←「此の當きは」と読む。○情に＝本當に。

一人を殺さば之を不義と謂ひ、必ず一の死罪有り。若し此説を以て往かば、十人を殺さば、不義を十重し、必ず十の死罪有らん。百人を殺さば、不義を百重し、必ず百の死罪有らん。此のごときは天下の君子、皆知りて之を非とし、之を不義と謂ふ。今大いに不義を為して国を攻めむるに至れば、則ち非とするを知らず。従ひて之を誉め、之を義と謂ふ。情に其の不義なるを知らざるなり。故に其の言を書して以て後世に遺す。若し其の不義なるを知らば、夫れ奚の説ありてか其の不義を書して以て後世に遺さんや。(中略)今小しく非を為せば、則ち知りて之を非となし、大いに非を為して国を攻めむれば、則ち非とするを知らず。従ひて之を誉め、之を義と謂ふ。此れ義と不義との弁を知ると謂ふべけんや。是以て天下の君子の義と不義とを弁ずるの乱るるを知るなり。

14 老子「老子の逆説」(李耳)

(A) 江海所以能為百谷王者、以其善下之。故能為百谷王。是以聖人欲上民、必以言下之、欲先民、必以身後之。是以聖人処上而民不重、処前而民不害。是以天下樂推而不厭。以其不爭、故天下莫能与之爭。

○老子＝姓は「李」、名は「耳」。春秋時代の哲学者。諸子百家のうちの道家は彼の思想を基礎とし、道教は彼を始祖に置く。○江海＝長江や大海。○百谷＝多くの谷川。○後れる＝あとにならぬ。

(A) 江海の能く百谷の王たる所以の者は、其の善く之に下るを以てなり。故に能く百谷の王たり。是を以て聖人は民に上たらんと欲すれば、必ず言を以て之に下り、民に先んぜん欲すれば、必ず身を以て之に後る。是を以て聖人は上に処りて民重しとせず、前に処り

て民害とせず。是を以て天下推すことを楽しんで厭はず。其の争はざるを以て、故に天下能く之と争ふもの莫し。

(B) 天下莫柔弱於水。而攻堅強者、莫之能勝。以其無以易之也。故柔之勝剛、弱之勝強、天下莫不知、莫能行。是以聖人云、「受国之垢、是謂社稷主。受国之不祥、是謂天下王。」正言若反。

○垢＝恥辱　○社稷＝国家

(B) 天下水よりも柔弱なるは莫し。而も堅強を攻むる者は、之に能く勝つもの莫し。其の以て之を易ふる無きを以てなり。故に柔の剛に勝ち、弱の強に勝つは、天下知らざる莫きも、能く行ふもの莫し。是を以て聖人と云ふ、「国の垢を受くる、是れを社稷の主と謂ふ。国の不祥を受くる、是れを天下の王と謂ふ」と。正言は反するが若し。

15 莊子「莊子の寓言」(莊周)

(A) 莊子釣於濮水。楚王使大夫二人往先焉。曰、「願以竟内累矣。」莊子持竿不顧曰、「吾聞、『楚有神龜、死已三千歲矣。王巾笥而藏之廟堂之上。』此龜者、寧其死為留骨而貴乎、寧生而曳尾於塗中乎。」二大夫曰、「寧生而曳尾於塗中。」莊子曰、「往矣。吾將曳尾於塗中。」

○莊子＝中国戦国時代の思想家、『莊子』の著者。道教の始祖の一人。無為自然を基本とし人為を忌み嫌う。老莊思想。○濮水＝川の名。○竟内＝国内。○累わす＝ゆだねる。○神龜＝靈験あらたかな龜。○廟堂＝祖先の靈を祭つた建物。みたまや。○巾笥＝布で包み箱に入れる。○蔵める＝しまっておく。○塗中＝泥の中。

(A) 莊子濮水に釣る。楚王大夫二人をして往きて先んぜしむ。曰はく、「願はくは竟内を以て累はさん」と。莊子竿を持し顧みずして曰はく、「吾聞く、『楚に神龜有り、死して已に三千歳なり。王巾笥して之を廟堂の上に蔵む』と。此の龜なる者、寧ろ其れ死して骨を留めて貴はるるを為さんか、寧ろ生きて尾を塗中に曳かんか」と。二大夫曰はく、「寧ろ生きて尾を塗中に曳かん」と。莊子曰はく、「往け。吾將に尾を塗中に曳かん」と。

(B) 恵子謂莊子曰、「子言無用。」莊子曰「知無用而始可与言用矣。夫地非不広且大也。人之所用容足耳。然則側足而墊之、致黄泉人尚有用乎。」恵子曰、「無用。」莊子曰、「然則無用之為用也亦明矣。」

○恵子＝魏の宰相。魏の恵王・襄王の二代にわたって仕える。○容れる＝置く。墊＝ほる。掘り下げる。○黄泉＝地下の水

(B) 恵子莊子に謂ひて曰はく、「子の言は用無し」と。莊子曰はく「無用を知りて始めて与に用を言ふべし。夫れ地は広く且つ大ならざるに非ざるなり。人の用ふる所は足を容るるのみ。然らば則ち足を側りて之を墊り、黄泉に至らば人尚ほ用ふることに有りや」と。恵子曰はく、「用ふることに無し」と。莊子曰はく、「然らば則ち無用の用たるや亦た明らかかなりと。」

16 韓非子「韓非子の政治論」(韓非)

人主將欲禁姦、則審合刑名者、言与事也。為人臣者陳其言、君以其言授之事、以其事實其功。功当其事、事当其言則賞、功不当其事、事不当其言則罰。(中略) 昔者韓昭侯醉而寢。典冠者見君之寒也、故加衣於君之上。覺寢而説、問左右曰、「誰加衣者。」左右対曰、「典冠。」君因兼罪典衣与典冠。其罪典衣、以為失其事也。其罪典冠、以為越其職也。非不惡寒也。以為侵官之害甚於寒。故盟主之畜臣、臣不得越官而有功。不得陳言而不当。越官則死不当則罪。

○人主＝君主。○姦＝悪事。○審合＝詳しく考え合わせる。○為る＝なる。○責める＝義務の履行を求める。

○昭侯＝戦国時代の韓の君主。○典冠＝君主の冠をつかさどる官。○典衣＝君主の衣服をつかさどる官。○以為＝思うには〜と。

人主將に姦を禁ぜんとして欲すれば、則ち刑名を審合せよとは、言と事となり。人臣なる者其の言を陳べ、君其の言を以て之に事を授け、其の事を以て其の功を責む。功其の事に当り、事其の言に当れば則ち賞し、功其の事に当らず、事其の言に当らざれば則ち罰す。(中略) 昔者韓の昭侯醉ひて寝ぬ。典冠の者君の寒きを見るや、故に衣を君の上に加ふ。寢より覺めて説び、左右に問ひて曰はく、「誰か衣を加へし者ぞ。」左右対へて曰はく、「典冠なり」

と。君因りて典衣と典冠とを兼ねて罪す。其の典衣を罪するは、以て其事を失ふと為せばなり。其の典冠を罪するは、以て其の職を越ゆると為せばなり。寒きを悪ざるに非ざるなり。以為へらく官を侵すの言は寒きよりも甚だしと。故に盟主の臣を畜ふや、臣官を越えて功有るを得ず。言を陳べて当たらざるを得ず。官を越ゆれば則ち死し、当らざれば則ち罪せらる。

17 雑説「伯樂と千里の馬」(韓愈)

世有伯樂、然後有千里馬。千里馬常有、而伯樂不常有。故雖有名馬、祇辱於奴隸人之手、駢死於槽櫪之間、不以千里稱也。馬之千里者、一食或尽粟一石。食馬者、不知其能千里而食也。是馬也、雖有千里之能、食不飽、力不足、才美不外見。且欲与常馬等、不可得。安求其能千里也。策之不以其道。食之不能尽其材。鳴之不能通其意。執策而臨之曰、「天下無馬。」

嗚呼、其真無馬耶、其真不知馬也。

○韓愈かんよ 中国唐代中期を代表する文人・士大夫。24歳で科挙に合格。官僚としては不遇であったが、詩人としては白居易と並び称され、柳宗元とともに古文復興運動の中心人物として活躍。柳宗元と韓愈で「韓柳」と並称される。○伯樂はくらく 馬の目利きの人。○千里馬せんりま 一日に千里も走る名馬。○奴隸人ぬれいじん 身分の低いしもべ。○槽櫪そうれき 馬小屋。○駢死へんし 首を並べて死ぬ。○食やしな 養う。○才美さいび 優れた才能。○見あつ 見える 外に見えてくる。○常馬じょうま 普通の馬。○策さく 打つ 馬にむち打つ。

世に伯樂有りて、然る後に千里の馬有り。千里の馬常に有れども、伯樂は常に有らず。故に名馬有りと雖も、祇だ奴隸人の手に辱められ、槽櫪の間に駢死して、千里を以て称せざるなり。馬の千里なる者は、一食に或いは粟一石を尽くす。馬を食ふ者は、其の能く千里なるを知りて食はざるなり。是の馬や、千里の能有りて雖も、食飽かざれば、力足りず、才の美外に見れず。且つ常馬と等しからんと欲するも、得べからず。安くんぞ其の能く千里なるを求めんや。之を策うつに其の道を以てせず。之を食ふに其の材を尽くさしむること能はず。之に鳴けども其の意に通ずること能わず。策を執りて之に臨みて曰はく、「天下に馬無し」と。嗚呼、其れ真に馬無きか、其れ真に馬を知らざるか。

18 送薛存義之任序「官吏の本文」(柳宗元)

凡吏於土者、若知其職乎。蓋民之役、非以役民而已也。凡民之食於土者、出其什一備乎吏、使司平於我也。今受其直怠其事者、天下皆然。豈唯怠之、又從而盜之。向使傭一夫於家、受若直怠若事、又盜若貨器、則必甚怒而黜罰之矣。以今天下多類此、而民莫敢肆其怒而黜罰何哉。勢不同也。勢不同而理同。如吾民何。有達於理者、得不恐而畏乎。

○凡そ＝概して。○土＝土地。○什一＝收穫の十分の一。○平＝公平な政治。○向使し＝もし…すれば。
○直＝俸給。○若＝お前(目下の者に用いる)。○貨器＝金目のもの。○黜罰＝追い出して罰する。○肆＝好き勝手に。○勢＝権力。○理＝道理。○畏れる＝慎む。

凡そ土に吏たる者、若其の職を知るか。蓋し民の役に於て、以て民を役するのみに非ざるなり。凡そ民の土に食する者は、其の什一を出だして吏を傭ひ、平を我に司らしむるなり。今其の直を受けて其の事を怠る者、天下皆然り。豈に唯だに之を怠たるのみならんや、又従ひて之を盗む。向使し一夫を家に傭ひ、若の直を受けて若の事を怠たり、又若の貨器を盗まば、則ち必ず甚だ怒りて之を黜罰せん。今の天下の多く此れに類するを以てして、而も民敢へて其の怒りを肆にして黜罰する莫きは何ぞや。勢は同じからざればなり。勢は同じからざれども理は同じ。吾が民を如何せん。理に達する者有らば、恐れて畏れざるを得んや。

19 赤壁賦「水と月」(蘇軾)

蘇子曰、「客亦知夫水与月乎。逝者如斯、而未嘗往也。盈虚者如彼、而卒莫消長也。蓋將自其變者而觀之、則天地曾不能以一瞬。自其不變者而觀之、則物与我皆無尽也。而又何羨乎。且夫天地之間、物各有主。苟非吾之所有、雖一毫而莫取。惟江上之清風与山間之名月、耳得之而為声、目遭之而成色。取之無禁、用之不竭。是造物者之無尽藏也。而吾与子之所共適。」

○蘇軾(蘇子) 〓 中国北宋の政治家、文豪、書家、画家。二十二歳のときに弟の蘇轍とともに優秀な成績で科挙に合格し進士となる。官僚・政治家としては王安石の新法に反対し、たびたび左遷され、詩作、書、絵画その他の多彩な趣味に没頭し近世的「文人」の代表的存在となる。唐宋八大家の一人。○盈虚 〓 満ち欠け。○肖長 〓 減ると増えると。○將た 〓 まさか 〓 ではない。○造物者 〓 天地間の万物を創造した神。

蘇子曰はく、「客も亦た夫の水と月とを知るか。逝く者は斯くの如くなれども、未だ嘗つて往かざるなり。盈虚する者は彼の如くなれども、卒に消長する莫きなり。蓋し將た其の変ずる者よりして之を觀れば、則ち天地も曾ち以て一瞬たること能はず。其の變せざる者より之を觀れば、則ち物と我と皆尽くること無きなり。而るを又何をか羨まんや。且つ夫れ天地の間、物各主有り。苟しくも吾の有する所に非ずんば、一毫と雖ども取ること莫し。惟だ江上の清風と山間の名月とは、耳之を得て聲を為し、目之に遭ひて色を成す。之を取れども禁ずる無く、之を用ふれども竭きず。是れ造物者の無尽蔵なり。而して吾と子との共に適する所なり。」

20 広笑府「饅頭怖い」(馮夢竜)

有貧士餒甚。見市有鬻饅頭者、偽大呼仆地。主人驚問其故。曰「吾性畏饅頭。」主人因設数十枚於空室中、而閉士於内、冀相困以為一笑。久之寂如。乃啓門、見其搏食過半。詰之、則曰、「不知何故、忽不覺畏。」主人怒叱曰、「汝得無尚有他畏乎。」曰、「無他、此際只畏苦茶兩碗。」

○馮夢竜 〓 中国明末期の小説家、著作家、陽明学者。○餒える 〓 飢える。○仆れる 〓 倒れる。○啓く 〓 開ける。○搏 〓 つかむ。

貧士餒ること甚しき有り。市に饅頭を鬻ぐ者有るを見て、偽り大いに呼びて地に仆る。主人驚きて其の故を問う。曰はく「吾性饅頭を畏る」と。主人因りて数十枚を空室中に設けて、土を内に閉じ、相困しめて以て一笑と為さんことを冀ふ。之を久くして寂如たり。乃ち門を啓けば、其の搏み食らふこと半ばを過ぎたるを見る。之を詰れば、則ち曰はく、「何の故なるかを知らず、忽ち畏るるを覚えず」と。主人怒り叱して曰はく、「汝尚ほ他に畏るもの有ること無きを得んや」と。曰はく、「他無し、此の際只だ苦茶兩碗を畏るるのみ」と。

21 搜神記「幽霊は存在するか」(干宝)

阮瞻字千里、素執無鬼論。物莫能難。每自謂此理足以弁正幽明。忽有客通名詣瞻。寒温畢、聊談名理。客甚有才弁。瞻与之言良久、及鬼神之事、反復甚苦。客遂屈。乃作色曰、「鬼神古今聖賢所共伝。君何得独言無。即僕便是鬼。」於是變為異形、須臾消滅。瞻默然、意色太惡。歳余病卒。

○干宝 東晋の政治家・文人。陰陽術数を好み『易』に興味をもち、『周易注』『春秋左氏伝義』『周官礼注』などの著作があるほか、神仙・占卜・妖怪などについての説話・伝説を集めた小説集『搜神記』を残す。○阮瞻 人名。○鬼・鬼神 幽霊。○毎に いつも。○謂う ・・・であると考ええる。○弁正 正邪、善悪、適否などを判断して正すこと。○幽明 冥界と現世。○寒温 時候の挨拶。○聊か 少々。○良 少々。○太だ 非常にすぎる。○卒 亡くなる。

阮瞻字は千里、素より無鬼論を執る。物能く難する莫し。毎に自ら謂へらく此の理以て幽明を弁正するに足ると。忽ち客の名を通じて瞻に詣るあり。寒温畢はり、聊か名理を談ず。客甚だ才弁有り。瞻之と言ふこと良久しくして、鬼神の事に及び、反復すること甚だ苦し。客遂に屈す。乃ち色を作して曰はく、「鬼神は古今聖賢の共に伝ふる所なり。君何ぞ独り無しと言ふを得ん。即ち僕は便ち是れ鬼なり」と。是に於いて變じて異形となり、須臾にして消滅す。瞻默然として、意色太だ悪し。歳余にして病みて卒す。

22 慎思録・言志四録「語録から」(貝原篤信・佐藤坦)

(A) 人非聖人。誰無過。雖有過、知之而能改、則歸無過。故人有過、非所以為恥。苟私意蔽固、則雖有過、而不能知之。雖知之、又不能改。所以為可恥也。

○貝原篤信 貝原益軒・江戸時代の本草学者、儒学者。経学、医学、民俗、歴史、地理、教育などの分野で先駆者の業績を挙げる。亡くなる前年の八十三歳の頃、健康長寿の心得を著したベストセラー『養生訓』を出版。○慎思録 学問上の随想、論評を最晩年に編集した書 ○私意蔽固 我儘勝手な心が本心を覆って頑ななものにしてしまう

(A) 人聖人に非ず。誰か過ち無からん。過ち有りとも雖も、之を知りて能く改むれば、則ち過ち無きに帰す。故に人過ち有るは、以て恥と為す所に非ず。苟しくも私意蔽固すれば、則ち過ち有りとも雖も、之を知ること能はず。之を知ると雖も、又改むること能わず。以て恥づべしと為す所なり。

(B) 人方少壮時、不知惜陰。雖知、不至太惜。過四十已後、始知惜陰。既知之時、精力漸耗。故人為学、須要及時立志勉勵。不則百悔亦竟無益。

○佐藤坦 〓 佐藤一斎・江戸時代の儒学者。膝下から幕末に活躍した英才を多数輩出。○言志四録 〓 一斎が後半生の四十余年にわたり記した随想録。○方たり 〓 あたり。○惜陰 〓 時間を惜しむ。○竟に 〓 とうとう。

(B) 人少壯の時に方たりては、惜陰を知らず。知ると雖も、太だしくは惜しむに至りず。四十を過ぎて已後、始めて惜陰を知る。既に知るの時には、精力漸く耗す。故に人の学を為すや、須らく時に及びて志を立てて勉勵するを要すべし。不らずんば則ち百悔すとも亦た竟に益無からん。

23 先哲叢談「野中兼山」

野中兼山嘗来江戸、及帰期也、致書郷人曰、「土佐無物不有。自江戸齋帰、惟有蛤蜊一艘耳。海路幸無恙以帰日饋之。」衆以為嘗異味。計日待帰。既至、則命投其所漕於城下海中、不余一箇。衆怪問。兼山笑曰、「此不独饋諸卿、使卿子孫亦飫之也。」自此後、果多生蛤蜊、遂為名産。衆始服其遠慮。

○先哲叢談 〓 江戸初期から中期までの儒学者を対象とした漢文による伝記集。○野中兼山 〓 江戸時代初期の土佐藩家老、儒学者。新田開発・殖産興業・土木工事などに功績を残す。○饋る 〓 田畑で働く人や旅人に食物をおくる。○飫きる 〓 食べ飽きる。

野中兼山嘗て江戸に來たり、歸期に及や、書を郷人に致して曰はく、「土佐は物として有らざるは無し。江戸より齎らし歸るもの、惟だ蛤蜊一艘有るのみ。海路幸ひに恙がなくば帰日を以て之を饋らん」と。衆以て異味を嘗むと為す。日を計りて歸るを待つ。既に至れば、

則ち命じて其の漕する所を城下の海中に投ぜしめ、「一箇を余さず。衆怪しみ問ふ。兼山笑ひて曰はく、「此れ独り諸を卿に饋るのみならず、卿の子孫をして亦た之に飫かしまるなり」と。此より後、果たして多く蛤蜊を生じ、遂に名産と為る。衆始めて其の遠慮に服す。

24 近古史談「毛利元就」(大槻清崇)

元龜二年六月、芸候元就病將死。致諸子於前、呼取箭数条、一如其子之数。乃手自糾為一束、極力折之。不能断也。单抽其一条、随折随断。因戒曰、「兄弟猶此箭也。和則相依濟事。不和則各人各敗。汝等銘心勿忘。」次子隆景進曰、「夫兄弟之爭、必起於欲。棄欲思義、何不和之有。」元就悦以為然。顧余子曰、「宜從仲兄之言。」

○近古史談＝近世初頭の武將の逸話などを集め論評を加えたもの。○大槻清崇＝大槻磐溪・幕末から明治初期の儒学者。開港論を主張。○芸候元就＝毛利元就。○箭＝矢。○糾＝より合わせる。○抽く＝抜き出す。

元龜二年六月、芸候元就病みて將に死せんとす。諸子を前に致し、呼びて箭数条を取らしめ、一に其の子の数の如くす。乃ち手自ら糾はせて一束と為し、力を極めて之を折らしむ。断つこと能はざるなり。单に其の一条を抽くに、随ひて折れば随ひて断つ。因りて戒しめて曰はく、「兄弟は猶ほ此の箭のごときなり。和すれば則ち相依りて事を濟す。和せざれば則ち各人各敗る。汝等心に銘じて忘るること勿れ」と。次子隆景進みて曰はく、「夫れ兄弟の争ひは、必ず欲より起る。欲を棄てて義を思へば、何の不和か之れ有らん」と。元就悦びて以て然りと為す。余子を顧みて曰はく、「宜しく仲兄の言に従ふべし」と。

25 絶句・偶成 (杜甫・朱熹)

(A) 江碧鳥逾白 山青花欲然
今春看又過 何日是帰年

(B) 少年易老学難成 一寸光陰不可輕
未覺池塘春草夢 階前梧葉已秋声

(注) (B) の有名な七言絶句は長らく朱熹の作と信じられてきましたが、最近の研究により日本の十四世ごろの僧侶の作であることが判明しています。

○杜甫＝盛唐の詩人。幼少の頃から詩文の才能があり律詩の表現を大成させた。李白の「詩仙」に対して「詩聖」と呼ばれる。○江＝長江。○碧＝濃い青色。○逾＝ますます。○看＝みるみるうちに。○池塘＝池のほとり。○階前＝庭先。○梧葉＝青桐の葉。これが散り始めるのは秋の兆し。

(A) 江碧にして鳥逾白く 山青くして花然えんと欲す

今春看又過ぐ 何れの日か是れ帰年

(B) 少年老い易く学成難し 一寸の光陰軽んじずべからず

未だ覚めず池塘春草の夢 階前の梧葉已に秋声

26

香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁 其三（白居易）

日高睡足猶慵起 小閣重衾不怕寒

遺愛寺鐘欹枕聽 香炉峰雪撥簾看

匡廬便是逃名地 司馬仍為送老官

心泰身寧是歸處 故鄉何独在長安

○白居易＝白樂天・唐代中期の漢詩人。○香炉峰下・・・＝白居易が江州に左遷され司馬の官職に任命されたときに詠んだ漢詩。左遷されたものの悲壮感はなく悠々自適の心境が窺える。○慵い＝だるい。○小閣＝小さな家。○衾＝掛蒲団。○欹てる＝かたむける。○香炉峰＝中国江西省廬山の山中の山名。雲気の立ち上る様が香炉に似ているといわれる。○撥ける＝はね上げる。○山居＝山中の住居。○遺愛寺＝香炉峰の北にある寺の名。○匡廬＝廬山の別名。○司馬＝軍政と軍務を司る役職。○仍お＝やはり。○歸處＝安住の地。最終的に身を落ち着ける所

香炉峰下、新たに山居を下し、草堂初めて成り、偶東壁に題す

日高く睡り足りて猶ほ起くるに慵し 小閣に衾を重ねて寒きを怕れず

遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き 香炉峰の雪は簾を撥けて看る

匡廬は便ち是れ名を逃るるの地 司馬は仍ほ老を送るの官たり

心泰く身寧きは是れ歸する處 故郷何ぞ独り長安に在るのみならんや

遊子吟・貧交行（孟郊・杜甫）

（A）慈母手中線 遊子身上衣

臨行密密縫 意恐遲遲歸

誰言寸草心 報得三春暉

（B）翻手作雲覆手雨 紛紛輕薄何須數

君不見管鮑貧時交 此道今人棄如土

○遊子吟Ⅱ故郷を離れている者の歌の意。「遊子」は旅人、故郷を離れて遊学する人。○孟郊Ⅱ中国唐の詩人。狷介不羈で人嫌いのために若い頃は高山に隠れた。科擧に落第し続け四十半ば過ぎでようやく進士に及第、五十になって初めて任官されるが、その後まもなく病で急死し不遇の生涯を送る。このため、詩は困窮・怨恨・憂愁を主題としたものが多い。韓愈とならんで「韓孟」と称せられる。○遊子吟Ⅱようやく任官がなつた孟郊が任地の溧陽に老母を呼び寄せたときの作。○貧交行Ⅱ杜甫四十一歳の頃の作。科擧に落第して都長安で貧窮の生活を送り、旧友が相手にしてくれなかつたときの作。○遊子Ⅱ旅人。○寸草Ⅱ一寸ほどの短い草。ちっぽけなもの。○三春暉Ⅱ春三か月の日の光。○紛紛Ⅱ混じり乱れる様。

（A）慈母手中線 遊子身上衣

行に臨んで密密に縫ふ 意に恐る遅遅として帰らんことを

誰か言はん寸草の心 三春の暉き報い得と

（B）手を翻せば雲となり手を覆せば雨 紛紛たる輕薄何ぞ数ふるを須いん

君見すや管鮑貧時の交はりを 此の道今人棄てて土のごとし

古詩十九首（無名子）

去者日以疎 來者日以親

出郭門直視 但見邱与墳

古墓犁為田 松柏摧為薪

白楊多悲風 瀟瀟愁殺人

思還故里閭 欲歸道無因

○郭門かくもん＝町はずれの門。死者は通常その外に葬られた。○邱きゅう＝死者を葬った丘。○墳ふん＝土を高く盛った墓。
○松柏しょうはく＝松と兎の手柏。○白楊はくよう＝はこやなぎ。○瀟瀟しょうしょう＝物寂しい音の形容。○故里閭こりりよ＝ふる里。

去る者は日に以て疎く 来る者は日に以て親し

郭門を出でて直視すれば 但だ邱と墳とを見るのみ

古墓は犁かれて田と為り 松柏は摧れて新と為る

白楊悲風多く 瀟瀟として人を愁殺す

故里の閭に還らんことを思ふ 帰らんと欲すれども道因る無し

29 竹葉亭雜記(姚元之)

吾郷錢明經善詩賦。每歲督学科歲試古詩、錢必冠軍。一歲題為天柱賦。錢入場時、飲酒過多竟大醉、入号輒酣睡。同試者疾其每試居首、不肯呼之使醒。有納卷者過其旁、乃告之。錢始瞢然、已無及矣。卒爾問題、書七言絕句一首。詩云、

我来揚子江頭望 一片白雲數点山

安得置身天柱頂 倒看日月走人間

学使得卷、評云「此人胸中不知吞幾雲夢。」仍取第一。

○姚元之ようげんし＝中国清朝の書家。○錢明經せんめいけい＝人名。○督学とくがく＝官名。○科歲こさい＝科試と歲試・官吏登用のための予備試験。○冠軍かんぐん＝成績最上位者。○一歲さい＝ある年。○酣睡かんすい＝泥酔。○号ごう＝個室。○疾むにく＝憎む。○納卷者なつせんしや＝答案を回収する係の役人。○瞢然ぼうぜん＝はつきりしない。○卒爾そつじ＝にわかに。突然。○倒たふさ＝さかさまにする。○卷かん＝答案。○仍よつ＝よって。○雲夢うんむつ＝古代の長江中流域にあつた広大な湿原の名

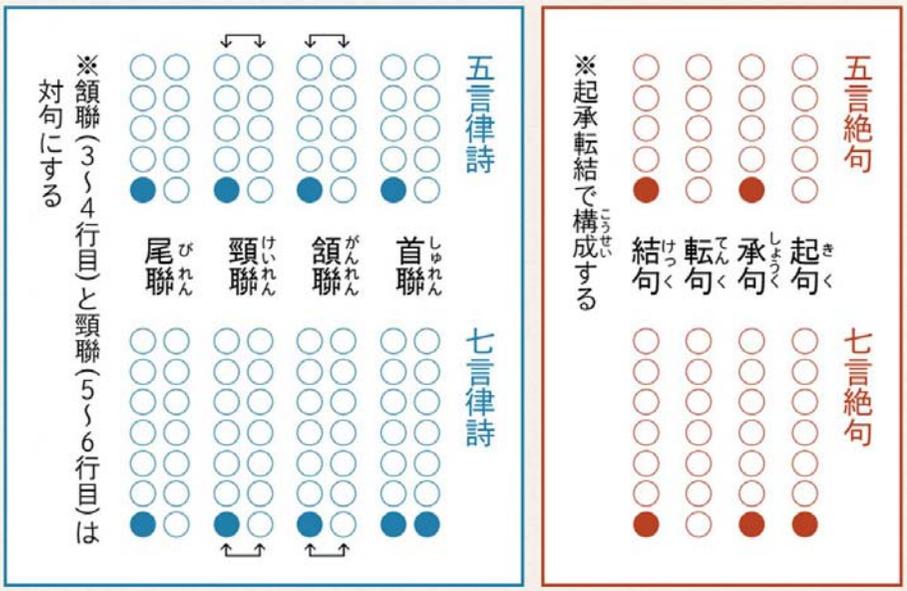
吾が郷の錢明經詩賦を善くす。每歲督学の科歲に古詩を試みるに、錢は必ず冠軍たり。

一歲題は天柱の賦たり。錢場に入る時、酒を飲むこと多きに過ぎ竟に大酔し、号に入るに輒ち酣睡す。試を同じくする者其の試毎に首に居ることを疾み、肯へて之を呼びて醒めしめず。納卷の者其の旁らを過ぐる有りて、乃ち之に告ぐ。錢始め瞢然たるも、已に及ぶ無し。卒爾として題を問ひ、七言絶句の一首を書す。詩に云ふ、

我揚子江頭に來たりて望めば 一片の白雲数点の山
 安くんぞ身を天柱の頂に置き 倒に日月の人間を走るを看るを得ん(と)
 学使巻を得て、評して云ふ「此の人胸中に幾雲夢を呑むかを知らず」と。仍りて第一に取る。

●漢詩の形式

- ・4行の「絶句」と8行の「律詩」があり、それぞれに1行が5字の「五言」と7字の「七言」があります。
- ・決まった行の最後(図の●)を同じ音の響きを持つ漢字で揃え、音読の美しいリズムを作る。これを押韻といえます。ただし、日本語の読みに合わせた書き下し文では押韻の効果は乏しくなります。
- ・対句は表現や意味が対になる句を並べたものです。



(出典) 閑塾タイムス : <https://www.kanjukutimes.com/media/kiji.php?n=115>